

小値賀島



福川 諒 (ふくがわりょう)

福岡県宮若市出身。日本映画学校卒業。映画製作会社を経て、国際ボランティア(オーストリア)に参加。帰国後、学童保育所で先生となる。平成25年度から小値賀町地域おこし協力隊として活動中。「自然児戦隊☆おちか島ん」「小値賀町消防団8分団」に参加。

暮らしや風土、生産者の 思いを伝える落花生事業



商品開発に取り組む小値賀産の落花生。

◆島人の挨拶に惚れこんで定住を決意

ぼくが前の仕事を辞めて日本中をめぐった旅の最終地点が、この長崎県小値賀島おちかでした。ほんとうは、鹿児島や沖縄まで行き、そこをゴールにしようと思っていたのですが、予算が底をつきそうだったので、あきらめて小値賀島をゴール地点にしたのです。

しかし、この島に足を運ぶと島の人々が、知らない旅人であるはずのぼくに挨拶をしてくれることに非常に驚きました。国内を長く旅していても、こんなことははじめてでした。そのことで、一発でこの島に惚れ込んでしまったのです。

その足で、すぐに役場へ行き「ここに住みたいのです!」と相談しました。これは偶然か必然か、そのときに対応していただいた役場の方から、ちょうど「地域おこし協力隊」を募集することを知り、それから約五ヶ月後、ぼくは小値賀町に地域おこし協力隊の隊員として採用されることになりました。



小値賀諸島は、佐世保市から西に70kmの海上にある大小17の島々からなる火山群島。五島列島の北部に位置する。

◆はじめての農作業に四苦八苦

入隊後、ぼくは一般財団法人小値賀町担い手公社という町の農業の中核を担う団体に配属されました。現在、ぼくはそこで、島の特産品である落花生の栽培、販売、そしてPR業務を行っています。

小値賀町へは、隊員になる以前に二、三回来ていたので、落花生が島の特産品であることは知りませんでした。



落花生畑のマルチ張り作業風景。

協力隊の募集内容を見たときに、はじめて落花生が島の特産品だと知ったのです。きつと、ぼくとおなじように小値賀の特産品が落花生だと知らずに島に来て、そのまま知らずに帰ってしまう観光客の方がいるはずだ、と思いました。

せっかく、よい特産品があるのだから、もつとうまくPRで

されば島のためになると考え、地域おこし協力隊の仕事で落花生関係に決めました。いままで生きてきて、畑や田んぼなど農業をやったことがなかったので、落花生の生産に少し興味があったのも理由のひとつです。

小値賀町担い手公社に入ってまず与えられた仕事は、落花生の種植え作業。島に来るまでずっと街中で暮らしていた自分としては、かなりしんどい作業でした。種植えが終わると、すぐに梅雨入り。畑には雑草がかなり生えてきます。それを手作業で抜いていく仕事です。夏が終わる少し前から収穫となります。収穫は、機械で抜いていくのですが、抜いたあと、ひとつひとつひっくり返して乾燥させる作業があります。畑仕事なので、天候にかなり左右されます。収穫時期は台風季節なので、とくに気をつかいます。そうやって、一年を通して、落花生の生産に携わることができました。

◆島の風土や歴史、思いをふくめて伝える

小値賀で落花生がつくられはじめたのは、戦中戦後の頃です。当時、子どもたちのおやつとして、つくり始めたのがきっかけだそうです。それが半世紀以上たったいまでは、貴重な特産品として島の活性化の一翼を担っています。

小値賀の落花生について、生産過程だけでなくその歴史までも理解することで、売るときに商品「おぢか島の落花

生」のバックグラウンド（商品の背景）を伝えることができるようになります。現在では、落花生がいかにもひとつひとつ、ていねいにつくられているか、生産者の皆さんの思いや生活、風土をふくめて伝えるようにしています。

「おぢか島の落花生」は、収穫した落花生を乾燥させ、大きな鍋で炒めてつくっています。これらはすべて手作業で、いまはその工程をひとりのおばちゃんが行っています。そのため大量にはつくることができません。この現状を、地域おこし協力隊としてどう解決していくかが今後の課題です。



昨年は、アイランダー 2013 に参加して島の PR などを行った。

◆飲み会を利用して地域に溶け込む

地域おこし協力隊として、地域に溶け込むことは大切です。まず、地域に入ったいろいろな活動や団体に足を運ぶとよいと思います。たとえば、ほくは地区の行事や役目（地区のお手伝いや草刈り、海岸清掃など）に顔をだすのはもちろん、スポーツ活動にも積極的に足を運びました。学生るときからずっと卓球をやっていたので、卓球サークルに入りました。そこから、どんどんつながりができ、いまでは卓球のほかにはバトミントンもやっています。地区の消防団にも入りました。

ほくが住んでいる地区は、若い人がか



地域おこし協力隊の定例会の様子。



県北小値賀会で島の物産をPR。

なり少なく、団員の平均年齢も小値賀の中では高いほうです。ちなみに、ほとんどのつぎに若い人は三〇代後半になります。

地域に溶け込むためにいちばん大切なのは、飲み会です。行事のあとの飲み会、消防訓練後の飲み会など、小値賀に来て飲む回数が増えました。ひどいときは、一週間毎日おかげさまで、島に来て八ヶ月で一三キロも太ってしまいました。小値賀の人たちは、人なつっこいのですが、挨拶以降の会話（コミュニケーション）が苦手なように感じます。だから、お酒の力を借りて、相手のことをよく知ろうとしているようです。

◆島のあたりまえを自分のあたりまえにしない

こうやって一年間過ごしてみると、小値賀の中でのつながりがどんどん広がっていききました。島が小さい分、島内

のつながりや仲間意識の強さはかなりのものです。ぼくは、困ったときにすぐに相談できる相手がいったり、近所のおばちゃんたちから夕食をいただいたり、地域の人たちに生かされています。

しかし、どっぷり小値賀に馴染んでしまっただけではないとも思っています。表向きは馴染んでも、心まで馴染んでしまうと「小値賀のあたりまえが、自分にとってもあたりまえ」になってしまい、よそ者目線ではなくなってしまうからです。小値賀のあたりまえをあたりまえとせず、ぼく自身がよそ者だからこそみつけることができる、小値賀の風土や習慣、生活のすごいところを探していきたい。ぼくは、その小値賀のよいところをこれからも残していきたい。新しい人（イターナー）や若い人たちにつなげていく架け橋となればと思います。これは、「地域おこし」「地域づくり」という言葉とは少しちがっており、昔の人たちが築き上げてきた文化や習慣、生活、コミュニティなどを、いまのぼくらが残していくことなのかもしれません。ぼくをふくめ、いまの若い人たちにとっては、それらが新鮮で斬新なものに映ると思います。

◆交流や発信の拠点としてのゲストハウスを

現在は落花生業務に携わっているぼくですが、任期終了後は、小値賀島で「ゲストハウス」を開こうと考えていま

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

小値賀町は、面積がおおよそ25km²、世帯数1,312戸、人口2,705人(平成26年5月末現在)と、長崎県ではもっとも小さな自治体です。

産業としては漁業の水揚げが年間約8億円、次いで農業の販売額が約4億円となっています。また、近年は島の農家や漁師のお宅に泊まって島暮らしを体験する「民泊体験」や、築100年以上の古民家を現代風にリフォームした「古民家ステイ」などの取り組みで注目を集め、平成24年度には、長崎県の自治体では初となる「地域づくり総務大臣表彰」の犬賞を受賞しました。

このように交流人口は年々増加傾向にあるものの、島には働き口が少なく、高校生のほとんどが毎年島を離れている現状です。国の推計では2040年までに現在のおよそ半分にあたる1,400人まで人口は落ち込むのではないかと予想されています。

●隊員の活躍

そこで地域活性化の一助にならないかと、当町では県内でも先駆けて平成22年度から総務省の「地域おこし協力隊」制度を活用しました。町の特産品である落花生」の生産拡大事業の業務や、観光ネイチャーガイド業務にあたってもらうことにしました。

しかしながら、先進事例が乏しかった当時は、労働の穴埋めとしての認識が行政側に強く、配属先にすべてを任せっきりにしてしまったことで、アフターフォローなどほとんどできておらず、結局3年後の定住に結びつけることができず、泣く泣く島を後にした隊員もいました。

このような状況を打破すべく、2期目となる現在の協力隊員たちに対しては、毎月ミーティングを行い、公私を含めた悩みや、3年後の起業に関する相談を受けるようにしました。

●これからへ向けて

例えば起業に結びつけるための企画書をつくっても、らい、県の補助などを活用して、講師を招へいしたり、スキルアップのための研修や現地視察の回数も増やすようにしました。今後は、役場や所属団体内でも彼らの思いを共有するために報告会なども開催したいと考えています。

まだまだ未熟なところが多く、彼らの熱い思いと、地域の活性化をきちんと結びつけてやれているかといえば、疑問なところは多々ありますが、今後人口が減少していく中で、島の振興の鍵となる可能性のある隊員達の熱意に応え、形にしていいため、隊員と一緒に歩んでいけたらと思います。

この「地域おこし協力隊制度」は、過疎地の地方再生を促すツールであろうと、大きな期待をしています。

(長崎県小値賀町総務課 神崎健司)

す。小値賀町では、民宿をやっている方が高齢であったり、後継者がいなかったりといった問題に直面しています。これは、地域おこし協力隊として島の人たちとふれあう中で、みつけた課題でした。

ぼくは、ゲストハウスを地域おこし協力隊の拠点や、島人たちと旅人が交流できる場所にしたとと考えています。これには、地域おこし協力隊として築き上げた島内のつながりを活かすことができます。

国内外からの旅人(風)が小値賀に来て、そこで島(土)の文化・習慣・生活に触れることで、新しい「風土」が生

まれる。数十年後に、それが小値賀の文化や習慣になっているかもしれません。その発信地が、ぼくがやろうとするゲストハウスなのです。

これは、日本の歴史をみてもわかることで、とくに長崎がそのいい例だと思っています。長崎は昔から海外との貿易で栄えてきた町です。海外の文化が入って来て、いまではそれが長崎の文化になっているからです。

ぼくは、島内はもちろん、全国の地域おこし協力隊や、世界中の人たちとのネットワークを広げていき、今後の小値賀の発展につながるよう頑張りたいと思います。

■